これ国家主義の大敵なり』（一〇九頁）と峻烈になつたのを見て、急転直下態度を変じたものとし、中共の現実的観点と偽瞞的性格に帰して結論するが、ここの説明は十分でない。中共だけに限つて云えば、成立直後の彼等にどれ程の力があつたか疑問である。例えば中共簡明歴史に『中国共産党孫氏に対して既に同情を表せず、陳炯明にも亦公開援助を与えず、蓋し該党、当時尚お未だ重要の地位を占有せず、此の問題に対して自己の確定する意見を発表する能わず。且亦北伐の能く成功するやいなやを信ぜず』（一〇八頁）とある資料を、如何に考えるかという解釈上の問題がある。中共の変動ぶりは判るが、直ちに聯陳倒孫に結びつくかどうか、このへんの説明が十分納得いかない。次に観音山事件後、中共が上海に蟄居中の孫文を訪ね、唯一人信頼できる民主主義者として国共合作を申入れたことをどう解釈するか。武力重視、呉佩孚、陳炯明信頼から、一転して孫文に接近していく過程が全然説明されていないため、唐突の感を免れない。ここで大切なのは、事件直後に農民、プチブル、民主勢力との共斗を決定している中共ニ全大会宣言（二二・七）と二七惨案（一九二三・二・七）をめぐる意義であろう。ことに後者考コミンテルンに与えた打撃と政策転換、及びそれをめぐる中共の動きをもつと考慮に入れて説明して欲しかつた。でないとこの間の状況はハッキリしない。また陳炯明事件を契機に、孫文がいつそう連ソ容共の決意を堅めたというが、その背景は何なのか意味がわからない。完結されていないので何とも云えないが、ここでの結論は安易に出されたきらいがないでもない。

ともあれ論文は三篇とも豊富な資料を駆使し、従来ほとんど論じられなかつた問題に、新しく分析を試みようとする意欲的な作品であり、教えられるところも少くなかつた。紙数の関係上、触れることのできなかつた沈雪竜氏以下の論文も、それぞれ興味あるテーマだが、中でも全漢昇氏の『漢治萍公司之史的研究』は、公司の歴史を清末、民初、第一次大戦時期、大戦後の四期に分け、各時期における資本、経営、生産、市場関係及び借款、日中合弁、国有、省有等の問題を具体的に総括的に叙述し、公司不振の原因を克明に検討しているのが注目される。以上紹介しながら私見を加え、一応論評を試みたが、筆者の意図を十分察せず、独断に流れた感あることを恐れるものである。

（台北、正中書局、一九六〇年、第一冊三〇〇頁、第二冊四九六頁）

李能和著

韓国道教史

窪　德　忠

道教は、一口に中国の民族宗教といわれる。そのためか、従来道教の研究といえば、中国のそれに限られていて、日本や朝鮮などを始めとする東アジア諸国への伝播についてはほとんど注意が払われず、わずかに小柳司気太博士が日本の庚申信仰や修験道への

影響を、三品彰英博士が新羅の花郎との関係を指摘し、三木栄氏が朝鮮の道教医学に注目しておられるにすぎない。傅勤家も、その著「中国道教史」の一節で、一応日本・朝鮮への伝播に言及しているが、それは前記両博士説の、いわば転載に止まっている状態である。従つて、道教の他国への伝播に関する本格的な研究は皆無にちかく、手をつけられないままに放置されていたといつても、あながち過言ではない有様であつた。今日かかる分野の意義をきわめて低く評価する風潮が一部に認められるのは、研究の欠除の然らしめた結果にほかなるまい。

けれども、日鮮両国のほかになお、VietnamのCaodaismにも道教的な要素が色濃く認められるから、実際には、道教は意外に広く各国、各地に伝播して、その地土着の宗教や信仰と密接に結びついて、人々の精神生活に大きな影響を与えていたに相違ない。そこで、道教研究の上からは、この方面は、重要かつ興味ふかい一つの新しい研究分野といわなければならないのである。ここしばらく、庚申信仰を中心として道教の日本への伝播を眺めてきた私は、ごく最近になつてようやく、きわめて漠然とではあるけれども、朝鮮における道教のもつ重要性に思いいたり、いつの日かその研究に手をそめてみたいとひそかに考えていた。その矢先に目にふれたのが、本書である。こんなことから、朝鮮の道教に関する最初の本格的な研究書として、本書のもつ価値と意義とはきわめて高く評価しなければならないのである。

本書には、序や跋の類が一切なく、著者に関しても、単に「無能居士李能和輯述」と記るされているのみなので、朝鮮関係についてはまつたく無知な私には、著者の経歴や出版の経緯などは皆目わからなかつた。しかし、幸いにして東洋文庫の田川孝三氏の御教示によつて、いささか知ることができた。それによると、著者はもと朝鮮史編修会で同氏と机を並べていた両班出身者で、昭和十二年に同会を辞された。仏教の居士であつた上に、南人党に属していたために、ともすれば不遇であつたが、学徳ともにすぐれた先覚者の一人として知られていた。資料の蒐集にはとくに熱心で、みづから広く各地に採訪の旅を重ね、珍しい資料を続々発見されたという。本書には引用書目はないが、中国・朝鮮あわせて百部以上におよぶ貴重な資料が引用、駆使され、しかもそのなかに私たちのみられないものが多く含まれているのは、その努力の如実な証拠である。そうして、まさに日夜学にいそしんで倦むところを知らないという篤学の士のタイプであつたが、他人にはきわめて親切で、著者の世話になつた訪鮮の日本人学者も多かつた。惜しいことに、すでに他界され、本書は、その歿後に発見された遺稿の由である。本書が原稿の写真版なのは、おそらくそのためであろう。史林、青丘学叢、朝鮮などの学術誌にもしばしば論文を発表し、本書の他に、朝鮮仏教通史、朝鮮基督教及外交史の両書を公けにされたことが知られているが、なお、朝鮮神事誌、朝鮮巫俗考など五部の未刊の稿本があつた由である(今西竜博士、朝鮮巫俗考序)。従つて著者は、自然宗教、原始信仰、儒仏道三教やキリスト教など、宗教や信仰方面に主な関心を向けられていた

ということができよう。

目次によれば、本書は全二十九章からなるけれども、第二十八章第五の三聖無極教、および支那道教源流大概と題する第二十九章は、その本文を欠いている。著者としては完成すべく目次までたてられたのに、その部分の資料蒐集の段階で他界されたのではなかろうか。終章の目次には、たとえば、「孔子以前之宗教」、「老子之道」、「儒教与方士之糅合」、「支那古今諸名士対道教之見解」など、私たちの興味をひく問題が含まれているだけに、その欠除はまことに残念である。なお、京城帝大附属図書館和漢書書名目録第二輯（昭和十年刊）に「朝鮮道教史　李能和　写本」とあり、本書の冒頭にも「朝鮮道教史」と題されているから、著者は稿本にはかく名づけておられたに相違ない。そして、本書はおそらく旧城大図書館蔵本の増補本であろう。

本書を内容的に大雑把にわけると、全篇の要約ともいうべき第一章総説は別にして、檀君神話、三神山説話などの神話や説話、盧生など秦の方士たちと朝鮮との関係などを扱つた部分（第二～第五章）、高句麗、百済、新羅への道教の伝播、その道教的な思想や、新羅の道士的人物の伝などをのべた部分（第六～第九章）、高麗（第十～第十四章）、李朝（第十五～第二十七章）の部分、およびごく最近の三教合一思想に立脚する新宗教あるいは宗教結社を扱つた部分の四部に大別することができる。そのあてられた章数からみても明らかであるが、高麗・李朝、就中李朝の部分に重点がおかれている。これは、朝鮮道教史上からも、資料の上からいつても、当然のことであろう。

第一の部分では、檀君神話が道教の教説に酷似すること（第二章）、蓬萊・方丈・瀛洲の三神山は一山で、それは朝鮮の太白山であり、黄帝が到つた崆峒山も朝鮮にあること（第三～第四章）、秦の盧生や韓終などの方士は朝鮮にきたこと（第五章）が、多くの中国・朝鮮の資料によつてのべられる。ただし、その論拠とした朝鮮の資料は、多くは李朝時代のそれである。

第二の部分では、まず五斗米道の高句麗伝来と泉蓋蘇文の道教を流入させる上奏（第六章）、百済の老子道徳経読誦者の存在と道教思想を指摘するが（第七章）、その際には、黒板勝美博士説と阿直岐のもつ道家思想が論拠の一つになつている。ついで、新羅政体の老荘思想の真髄をえていたことや、老荘浮屠兼渉者の存在を明らかにし、新羅の仙人や諸道士の伝を列挙する（第八～第九章）。この部分では、三国史記や三国遺事が多く用いられるが、道士の伝は青鶴集や五洲衍文長箋散稿など、李朝のものから拾拾されている。第九章末尾の、金庾信を張良に比べ、その孫の金巌を遁甲術の祖とする考えは、面白い。なお以上の部分は、著者がさきに発表した「朝鮮神教源流考」（史林七ノ三～四、八ノ一～四）の「神教」を「道教」に改め、さらに内容的に発展させたものである。

第三の部分のうち、高麗については、仏道合糅の祭事である八関斎、八聖祭、太一玉帳法（第十章）、老人星祭、北斗醮以下多くの祭醮や（第十一章）その青詞すなわち祭文（第十二章）、明の太祖の遣わした道士が行つた山川の祭祀（第十三章）、有名な道士の

伝（第十四章）などの紹介である。関係資料が逐一原文で掲げられているのは重宝であるが、青詞類の全文と出典名が記るされていないのは、今後の研究にいささかの支障をきたすのではなかろうか。

これに対して李朝の部分には、本書の約半分にあたる頁数がさかれ、資料もまたくわしい。とくに、高麗の福源宮の遺制をうけて造立された、李朝唯一の官立道観ともいうべき昭格殿（のちに昭格署と改称）について然りである。昭格殿については、その成立から廃止にいたる変遷、位置、職制、建物数（第十五章）、老子・玉皇大帝・天尊・北斗七星その他の星辰などの祭神とその醮祭、祭官の服色と祭儀、奏楽、祭儀、供物および祈雨その他の諸醮の種類を（第十六章）、主として実録によつて紹介している。祭官が、白衣で笏をもつたことは、いたく注意をひく。中国の道士と異なるためである。ついで、各地に造立された太清観の祭神、行事、成立と廃止（第十七章）、各地で行われた太一の祭祀（第十八章）、摩利山壇の祭天行事の意義（第十九章）、南極老人星の観念と祭儀（第二十章）、丹学派といわれる金丹道士や服食法にすぐれた道士の伝を列挙する（第二十一章）。これらがすべて、中国のそれと相違する原因は、どこに求められるのであろうか。つぎに著者は、ト占や命課を行つた盲僧に着目し、かれらが玉枢経をよみ、祈禳やト占を行う点を根拠として、これを道流と断ずる（第二十二章）。しかし、果して道士とみてよいかどうかは疑問である。おそらく、日本の北九州地区に多く見受けられる天台の盲僧に匹敵するのではなかろうか。なお、玉枢経に二種類あるとみる推定は、けだし卓見であろう。

ついで目を習俗や行事に向けて、守庚申、建築の際の道教的行事、大聖（孫悟空）祠、門神、歳画、暦、方位（第二十三章）、端午符その他の年中行事（第二十四章）、占星術、北斗信仰、本命元辰（第二十五～第二十六章）などをすべて道教のものとみて、関係の資料を列挙、紹介する。その資料が多方面にわたることは、敬服のほかはない。

第二十七章は、約五十年前（本書執筆時より）に、白蓮社にならつて結成された念仏結社妙蓮社の人々が、扶乩によつて作製した済衆甘露と題する善書と太上感応篇、および李朝における関帝信仰の紹介である。章名が「善陰隲教」であり、功過格や陰隲文その他の善書が数多く実在しているのであるから、本章はいま少し詳細に記すべきではなかつたろうか。惜しまれる点の一つである。終章は、古来の三教合一思想の概説と、それに基く天道教、侍天教、青林教、南学、太乙教、白白教などの宗教結社の紹介であるが、その実態調査資料による説明は貴重である。

以上、あえて章名に基づく表面的紹介を行つたが、それは、著者がほとんど自説を表面に出さず、もつぱら資料に語らせる体裁をとつているためである。それにしても、かかる表面的紹介によつてすら、本書が三韓以来の朝鮮の道教の内容や性格を明らかにした、文字通りの労作である由は了解して頂けたと思う。本書によつて、従来ほとんど知られていなかつた事実が紹介されたこと

は、本書を価値づけるとともに、後に続く者にとつて、将来の大きな指針となるであろう。従つて、学界を稗益するところはきわめて大きいといわなければならない。

本書が、従来まつたく未開拓であつた分野の開拓者的性格をもつものである以上、今日の日本の道教研究の段階からみれば、もちろん多少の不満が感ぜられないではない。けれども、ここに一々その点を指摘する必要はない。資料集ともいうべき本書の内容を十分に活用するとともに、道教の概念を明確に規定し、資料や史実の考証や批判を行う一方、本書を指針として宮廷関係以外の資料その他各方面の資料を鋭意蒐集して、道教教団の有無、道教医学と民衆との関係、道教信仰の民衆への浸透——諺文の善書が作られている——、およびその果した役割、歴史的変遷などを考察し、生きた朝鮮道教史をつくるのが、著者の学恩に報ゆる所以と考えるためである。また本書によつて、朝鮮の道教が完全なシンクレティズムであることが明らかになつた。この点は、道教のみならず、一般にある宗教が他国、他の地域に伝播した際におこる現象として、重要な示唆といわなければならない。著者はおそらく、一日も早く自己の意途に副つた業績が後学によつてだされることを待望しておられるに相違ない。

（東国大学校刊、檀紀四二九二年、四八九頁）

シェーカル著

サンスクリット戯曲—その起源と没落—

原　實

少くとも印度古代文化史の諸側面に関心を有し、それらの研究史に注意する者は、近時その研究に新しい視点の与えられた事に注目するであらう。印欧語比較文法の立場から、随時幾多の研究が記録される傍ら、梵語研究に所謂 Substrat-einflüsse[1] の研究が行われ、注目すべき成果は近時 Burrow-Emeneau 両博士による Dravidian Etymological Dictionary[2] に結晶した。文化史の上でも、印度文化の重要な概念である yoga, bhakti, pūjā, 苦行[3]等に、その起源を非アリヤンに求める努力が払われた。文化史研究の新しい視点が、多くの場合、インダス文明の発掘によつて提供された事は周知の事実である。ここに紹介せんとする I. Shekhar 氏の著書も亦この種の一連の研究動向に即するものであり、印度演劇の起源を非アリヤン文化に求めるものとして、その独創性を有して居る。

この考古学的発掘に先んずる時代に、印度演劇の起源をヴェーダに求めんとした事は自然である。[4]又学者によつてはギリシャ、[5]シャカ族等[6]の影響をそこに求めたのも当然の勢というべきである。著者はこれら過去の研究を批判しつつ、文献に対する考古学的具体的遺品の優位 (p. 9) を説き所謂「アリヤン民族の優越（Aryan